



JST社会技術研究開発事業 平成20年度採択プロジェクト

子どものネット遊び場の危険回避、 予防システムの開発

携帯、パソコン、ゲーム機…… 身近なものに危険が潜んでいる

子どもは判断力が十分ではありません。ですから意外なものから危険がもたらされる可能性があるのです。例えば、携帯電話やパソコンからのインターネット利用。特に携帯電話からのインターネットでは、いつでもどこからでもアクセス可能という便利さの半面、援助交際やネットいじめなどの危険と隣り合わせであり、子どもの被害が近年増加傾向に

あります。そのような危険をどのように回避したらよいのでしょうか。プロジェクト代表者で、NPO法人青少年メディア研究協会理事長下田さんと、プロジェクト実施者であるNPO法人職員の方へお話を伺いました。



左：加藤千枝さん、中央：下田博次さん、右：片山雄介さん

プロジェクトの概要

子どもを、インターネット利用から派生する危険から守るため、市民インストラクターと呼ばれる、子どもの見守り・指導をする人材の育成、活動支援プログラム構築が目標です。そのためCISS (Civil Instructor Support System=市民インストラクター支援システム) という情報通信システムを開発・運用し、ネット遊び場の情報、トラブル事例・対応策をデータベース化。地域で子育て・教育に携わる人に実際に利用してもらいながら開発を進めます。

研究期間：平成20年～平成24年

実施体制：下田グループ（代表者 下田博次、企画調査員 片山雄介、企画調査員 加藤千枝、企画調査員 小川真佐子 他）

NPOやボランティアがインターネット社会を正しい道へ導く

研究代表者：下田 博次 特定非営利活動法人青少年メディア研究協会 理事長

私は元々メディアの研究者です。インターネットという言葉すらない時代から、この新しいメディアの調査研究に係わってきました。私が特に注目してきたのはNPOの役割です。インターネット先進国のアメリカでは、技術開発の早い段階から中心になってきたのが民間非営利団体。インターネットの利用や技術アイデアの多くはNPOが担ってきたと言っても過言ではないほどです。私は、市民主導の社会でないと、インターネットの利用や産業は正常に発展しないというのが持論。まず、日本に根付いていないNPO法人という考え方を広めようと、群馬大学大学院では、NPOマネジメントの講座を開設し、群馬県NPO委員会の初代会長も務めました。

そうした中、1999年のある日、技術開発関係者からインターネット機能が付いた携帯電話を見せられ、直感的に危険に思いました。その頃アメリカでは、子どものパソコンからのインターネット利用で、問題が起きないように奔走していたのに、有害情報が増殖するなど、問題が起きていました。何も策を講じていない日本でフィルタリング無しに売り出されたその携帯は、まさに子ども向けインターネット機だからアメリカ以上の問題が起こる危険性が十分にあると考えました。

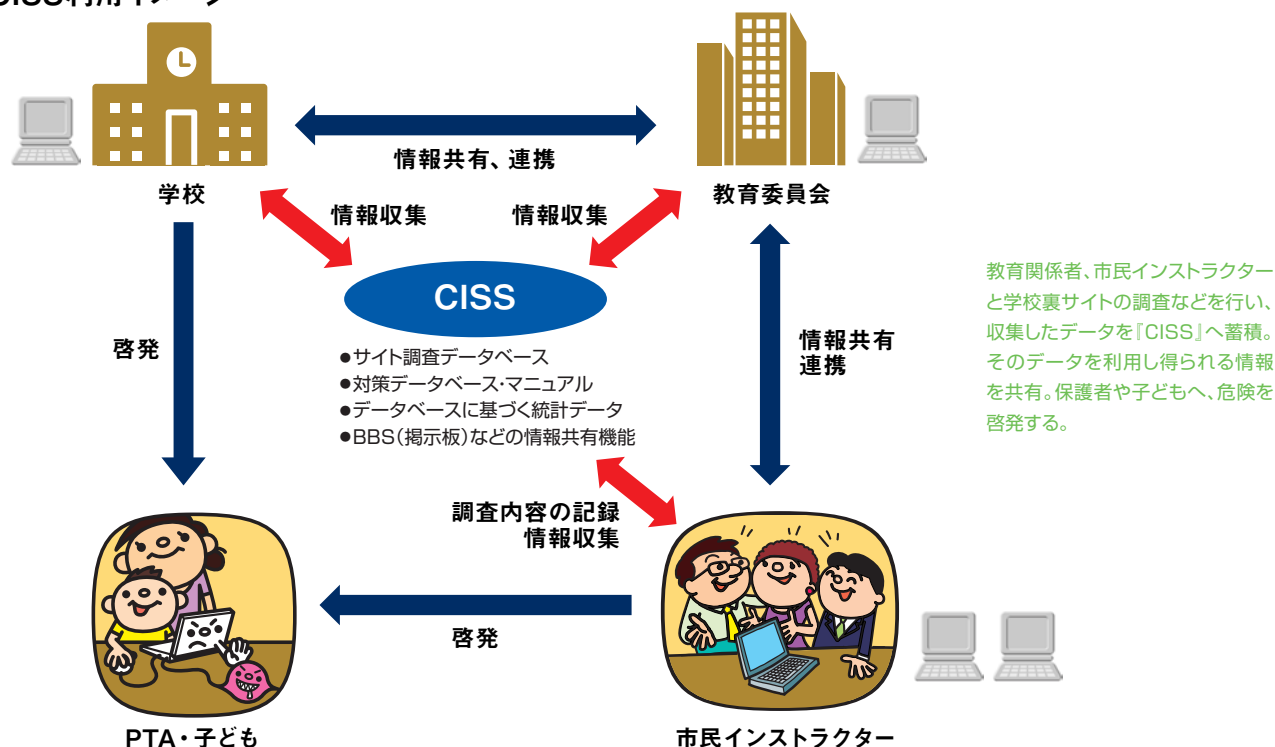
止まらないインターネット。手遅れにならないうちに対策を

時をたがわず国内では、子どもの携帯インターネット利用で、援助交際、ネットいじめ、ネット詐欺などの、被害・加害事例が多発。2001年5月、私は子どものインターネット利用のリスクを考える市民ネットワーク「ねちずん村」を立ち上げました。以来、啓発冊子制作・講習会を開催。2007年8月には、特定非営利活動法人青少年メディア研究協会を設立し、『CISS』のコンセプトを考案しました。

『CISS』とは、子どものインターネット利用で派生する問題を見守り、指導する親や教師を支援するシステムです。学校裏サイトやインターネット上で自己紹介ページを作成できるプロフなどの発信情報を、基礎調査票に基づいて調査し、内容を登録・蓄積。『CISS』を利用することで、関係者の情報共有が可能になり、連携して問題解決へ向うことができるようになります。それは地域内・地域間での情報共有へも発展。最終的にはペアレンタルコントロールと呼ばれる、子どものインターネット利用の見守り、指導ができる能力を高めることにつながるのです。昨年から、片山、加藤や小川にも、このプロジェクトに参加してもらい、さらなる改良を試みています。利用者へヒアリングを重ね、使いやすくすることで、子どものインターネット利用の問題解決へ役に立ちたいのです。

問題解決は、時間が経てば経つほど難しくなります。私自身、これほど深刻な状況になるとは、想像していませんでした。ですが、携帯電話は、これからも進化し存続します。子どもを取り巻く状況に、良い兆しはありません。このまま、携帯電話通信サービスを提供する会社や関係省庁だけに、対処を任せていては取り返しのつかないことになりますから、親や教師の側に立って支援する『CISS』が必要なのです。

CISS利用イメージ

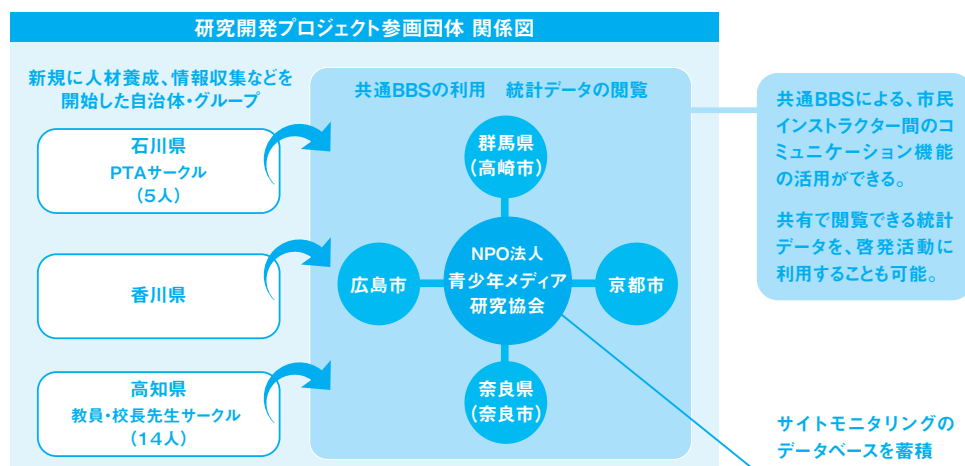


各協働先と手を組み、変化する状況に素早く対応できる体制を

携帯電話問題は中・高校生中心でしたが、最近はゲーム機でインターネットを始めている小学生にも、危険が迫っています。このような状況下、モデル都市を設定し、小学生からインターネットとどうつきあうかを保護者、教師共に勉強。小学生から高校生まで、段階的にインターネットをどのように開放していくかというプログラムを開始しました。設定されたモデル都市は高崎市、広島市、京都市です。

中でも、2008年から協働している高崎市教育委員会は、教育長が、市内の小・中学校全校の校長先生を集めて会合を開き、『CISS』に協力してくださいとお願いをしてくれました。また、群馬県青少年子ども課は、市民インストラクター養成講座を支援してくれ、私どものNPO法人と三者のコラボレーションで進行しています。

行政組織主体のケースとは別に、有志が集まった、いわば市民サークルが主体で参加してもらうケースがあり、高知県では教員・校長先生、石川県ではお母さんたちと協働しています。『CISS』の中核的な情報は、機密情報も含めて、群馬、広島、京都の3都市で共有し、協定を結び情報管理をします。サークルの方たちは、もう少し外側のオープンな部分で情報交換をするという関係です。最近になり香川県、奈良県とも、保護者、教師教育で協働し始めました。特に奈良県とは、群馬、広島、京都の3都市と情報を共有し、活動してもらう方針です。4年後には周辺情報をインターネットで公開するつもりですが、3年間はクローズし、個人情報の守り方を優先してやりたいと考えています。



危険性を知ってもらうためにも活動し続ける

『CISS』のシステム利用に関し、各委員会と協働したおかげで、最近、ようやく日本の行政組織の仕組みがわかってきました。例えば、群馬県には県教育委員会があり県教育長がいます。その他に、命令系統が全く別な群馬県青少年子ども課があり、学校外の生活指導や町の青少年環境改善を担当。ネットカフェのパトロールなどを実施してきました。子どもの携帯・インターネット問題は双方にまたがるので、パソコン1台設置するにも、それぞれに承認を取ってと、大変手間がかかります。

個人情報の取り扱いに関しても、もし問題が発生したら、どこが責任を取るかを明確にしないといけません。子どもたちのサイト遊び、ブログ発信などを見ると、当然、個人情報が蓄積されます。それを各自治体、たとえば高崎市教育委員会の責任者と、私どもが共有するわけですから当然です。いじめの現場証拠になるようなデータ、誹謗中傷や、リストカット本人が特定できてしまうなどの内容です。しかし、この情報を収集しなければ『CISS』の意味がないので、個人情報の取り扱いを巡る協定書を作成しました。

この先、どんな苦労が待っているかは未知数ですが、この問題の重要性を、いろいろな方に知ってもらうためにも、私が警鐘を鳴らし続けるしかないですね。20年後のインターネット利用を視野に、プロジェクト終了後も命の続く限り取り組んでいく覚悟です。

深刻化する子どものインターネット利用問題と『CISS』利用の取り組み

片山 雄介 特定非営利活動法人青少年メディア研究協会 企画調査員

大学時代に、下田先生のゼミで、学校裏サイトに関するラジオ番組を制作し、先生の研究内容に興味・関心を抱きました。卒業後、民間の会社で働いていたのですが、下田先生に、このプロジェクトへの参加を依頼され、2008年11月から職員として活動しています。NPO法人に所属することは、もちろん初めてだったので、心配がないわけではなかったのですが、インターネット利用の危険性・問題の深刻さなど、私なりに理解していましたし、その解決のために働く価値ややりがいを感じ、決心しました。

私の担当は、市民インストラクターという人材の育成、『CISS』の開発と改良です。例えば、協働している高崎市、京都市、広島市などから依頼を受け、市民インストラクター養成講座を開催したり、以前から活動している群馬県の市民グループなどへは、『CISS』を使って、“見守り”の輪を広げていきたいと思いますという働きかけを行っています。

子どものインターネット利用の実態や問題点については、大人の認識がまだまだ足りないというのが現状です。小・中学生に携帯電話は必要ない、携帯インターネットは危険だなどという報道で、漠然とした危機意識は高まっているとは感じます。実際に、どこが危険のかという問い合わせを受けることも増えました。しかし、講習会や啓発を聞いて、危険ことは良くわかったが、親として、教師として、どうしたらいいのかわからない、という悩みが多くなっているというのが私の印象です。

プロフ、ブログ、リアルという場で形成される人間関係に目を向けてほしい

子どもは、学校だけではなく、自宅へ帰ってからも裏サイトなど、バーチャルな空間で人間関係を維持したり、発展させたりしています。その行動をモニタリングすることで、学校や家庭では見えにくいネット上の様子を見守ろうというのが『CISS』利用のねらいの一つです。現在は、高崎市のある中学校で、インターネット利用見守りのモデルケースとなるような取り組みを始めました。学校生活の中では平穏に見えるけれど、ネット上では深刻な問題があったのかと、先生に驚かれることもあります。子ども同士のけんかで、発端はネット上のトラブルなのに、教師が理解できなかったために、問題が複雑になってしまったという事例もありました。親や教師は、ネットのことが分からないから頼るのはやめようという現象が出始めています。危機感を持った親・教師と情報交換しながら、解決策をいっしょに考えていきたい。『CISS』が手助けになるよう、今後も改良を重ねていきたいと思っています。



『CISS』の入力システムトップページ。
改良して、さらに使いやすくしたい

係われれば係わるほど『CISS』の重要性を認識

現状の『CISS』もそうですが、ネットの見守りは、その多くを人の手作業に頼っています。特に親・教師にとって有意義な情報が、そこから集められるわけですが、その一方で、システムの力を利用しないと関係者は疲弊してしまうのではないかと懸念もあります。プロジェクト実施中に、今まで実態が把握できていなかった子どものインターネット利用について、『CISS』を使えば、ある程度問題点が洗い出せ、学校での指導・ケアにつなげられるというレベルまで高めるのが私の目標です。最終的には全国に広めたい。プロジェクト終了後には、NPO法人以外の組織、例えば民間の組織に移行するなどの選択肢も視野に入れています。世の中に必要なシステムだと確信していますので、地域の人と連動し、活動し続けたいですね。

子育て・教育に真剣な大人の方に、子どものインターネット遊びの実態を知ってほしい

加藤 千枝 特定非営利活動法人青少年メディア研究協会 企画調査員

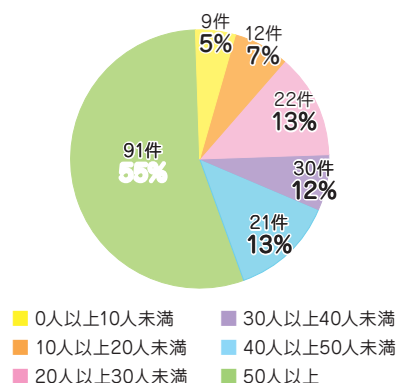
スタッフの片山と同じく、大学生時代には下田ゼミへ所属していました。そこで学校裏サイトに関するラジオ番組を制作。卒業論文は学校裏サイトの実態について書きました。大学卒業後、一度、民間企業に就職したのですが、青少年メディア研究協会が立ち上がると同時に、民間企業をやめ、NPO法人で働くことにしました。

実は、就職した会社が、インターネット上に動画を配信するサイトを管理・運営している会社でした。基本的には大人向けの動画サイトだったのですが、中には猥褻な動画も含まれており、10代の子どもたちも、その動画を閲覧することが可能であるという現状に直面することになったのです。私はこの会社で働き続けることはできないと考え、退職しました。今でもその動画サイトは存在していますが、子どもたちはパソコンからだけではなく、ケータイや小型ゲーム機からそのサイトを見ているのではないのでしょうか。私達が小学生や中学生時代には考えられなかったインターネット遊びが、今の子どもたちにとっては普通の遊びなのだとすると、驚きです。

同じ志の人たちと少しでも多くの問題解決を

まずは、子育て・教育に真剣な大人の方に、子どものインターネット遊びの実態を知っていただきたいですね。子どもたちがサイト上でどのような情報を目にしているのか、または、どのような情報を発信しているのか、一度ご覧いただきたいと思います。特に、子どもたちが発信している情報の中には、「毎日がつまらない」「疲れた」「暇、誰かかまって」「いなくなりたい」など、子どもたちの叫びとも取れる発信を多く目にします。インターネットの世界ですから、すべての発信が嘘・偽りのないものであるとは言い切れませんが、私の目から見て、子どもたちの発信の中には、本当に心配にならざるを得ないものも含まれています。そのような実態をご覧いただいた上で、今後、我々は、大人として何ができるのか、真剣に向き合っていくことが大切なのではないのでしょうか。子どものインターネット利用について、一緒に考え、悩み、実際に行動を起こすことができる地域の大人をたくさん増やしていくことが、今後の目標になると私は考えています。

1人当たりの友人数



ある携帯電話専用コミュニティサイトの中で、群馬県内の子どもが発信しているコンテンツ(167サイト中)に、相互リンクを張っているユーザー数を調査した結果、中には600人以上いるというユーザーも存在した

出典：NPO法人 青少年メディア研究協会「ケータイゲームサイト利用実態調査」

Profile



下田 博次

Shimoda Hirotsugu

愛知県生まれ。コンピュータ開発企画調査員、新聞記者、放送作家から、群馬大学社会情報学部大学院研究科教授、群馬大学特任教授を経て現職。著作に『子どものケータイ利用と学校の危機管理』『学校裏サイト』などがある。



片山 雄介

Katayama Yusuke

群馬大学下田ゼミにて活動。2007年3月同大学社会情報学部卒業後、東京にて就職。下田氏に請われ、2008年11月より同協会に参加。見守りシステム会社への報告担当、各教育委員会、自治体との調整役を務める。



加藤 千枝

Kato Chie

群馬大学下田ゼミにて活動。卒論は学校裏サイトの実態。2007年3月同大学社会情報学部卒業後、東京のIT企業へ入社。退社後、2007年9月より同協会に参加。企画調査員として働く。子どもの情報発信記録調査を担当。

■プロジェクト協働者

群馬県県庁生活文化部 少子化対策・青少年課
群馬県教育委員会 義務教育課
高崎市教育委員会
鳥取県教育委員会
広島市教育委員会
京都市教育委員会 事務局 生涯学習部 家庭地域教育支援担当
香川県教育委員会
奈良県教育委員会

インタビューを終えて

子どもの能力は限界がない。自分も持っている携帯電話やゲーム機が、思いもよらぬ使われ方をし、あらゆる方向へ世界を広げている。責任能力を問えない子どもに、大人は何というおもちゃを与えてしまったのだろう。これ以上、問題が深刻化しないように、自分ができることは何か。大人である自分の責任の果たし方を考えたい。

文：株式会社文化工房